

霊性知識人としての上原専祿

——その晩年の思想を中心に——

安藤 泰至

上原専祿(一八九九—一九七五)はドイツ中世史を専門とする著名な歴史学者で、東京産業大学(現一橋大学)学長、日教組国民教育研究所初代所長、国民文化会議会長などを歴任、六〇年安保闘争でも活発な発言を行い、戦後の教育運動、平和運動における代表的な知識人として活躍した。代々日蓮宗の熱心な檀家であった京都の商家に生まれた上原は、八歳で父を亡くし、松山で薬屋を営む伯父夫妻の養子となるが、この伯父・宗兵衛は田中智学率いる国柱会の熱心な会員であり、専祿も幼い頃より『法華経』や『日蓮上人御遺文』などの読書に親しんだ。上原自身も長年にわたって(一九五七年まで)国柱会の会員であったが、智学の日蓮主義には違和感を抱いたため国柱会には深入りせず、青年期以降は日蓮研究を中心としつつも、特定の宗教教団や宗派に属することなく、広く仏教やその周辺に関心をもち、戦後は宗教についても広く国民・大衆に語りかける知識人として活躍した。

娘・上原弘江による『上原専祿著作集』(評論社、一九八七年)の刊行は途中でストップしてしまい、第二〇巻に予定されていた『宗教論』は未刊のままに終わったが、宗教をめぐる論文、エッセイ、講演は、同著作集の第一六巻『死者・生者』、第二四巻『国民文化の論』、第二六巻『経王・列聖・大聖』に多く収められており、それらのテキストを通じて上原の宗教論

の輪郭、特質ははっきり見てとることができる。とりわけ妻・利子の死(一九六九年)以降の上原晩年の思想が結実した『死者・生者—日蓮認識の発想と視点』(一九七三年)における独自の「死者」論は、近年、末木文美士の『他者・死者たちの近代』をはじめとして、多様な分野の研究者たちから新たな注目を集めつつある。

上原は妻が自然に死んでいったのではなく、心ない医師たちによって、そしてそうした医療を可能にする現代社会によって「殺された」のだと主張した。その批判は、「生命尊重」の理念(タテマエ)とは裏腹に実際には患者の「生命」(むしろ「生活」「人生」)を蔑視する医療だけではなく、そうして無念にも殺されていった人々の死を自然なものとして容認し、おさまりの儀礼によって死者をあの世へと送り込む宗教や宗教者にも向けられた(「いまの日本人は、一方ではお医者さまに殺されて、他方では坊さんに、簡単に浄土や極楽に持っていわれている」)。上原は、残りの人生を亡き妻への「回向」三昧に生きることを宣言し、娘と共に京都に隠棲しつつ、日蓮研究に没頭した。彼の言う「回向」とは、死者をあの世に送り込む(追いやる)ことではなく、逆に死者をこの世に呼び戻すこと、無念にも亡くなったといった死者の声を聞き取りながら、その死者とともにこの世界を変え、歴史を作りあげていく作業(死者との共闘)を意味している。そして彼が歴史学者として、同時に一人の求道者としてそうした作業の遂行の先導者として仰いだのが、幼い頃から彼の「擁護者の聖者・教師的人格・導師的存在」であり続けた日蓮であった。

上原が晩年に展開したこうした医療批判や宗教批判を、一九六〇年前後の「国民文化論」時代の彼の思想との連関において読み直してみると、それが今日の生命倫理や死生学の問題意識を先取りしていることに驚かされる。上原の主張の眼目は、現代の医療や宗教によって私たちが生と死の課題にきちんと向きあうことを妨げられているならば、私たちはそうでないような新しい医療文化や宗教文化を、今、ここで自分たちのかけがえない人生を生きる「生活者」の視点からつくり直していかなければいけない、という点にある。こうして「宗教的立場から生命倫理を問う」のではなく「生命倫理の深みから宗教を問う」上原は、一九七〇年代後半以降の「霊性知識人」の先駆けとしても評価できよう。

西郷隆盛はキリシタンだったか？

坂 本 進

西郷さんが、キリシタンであったという説を発表されたのは、鹿児島・西郷南州顕彰会館長の高柳毅先生です。先生は、顕彰会誌『敬天愛人』十四号(一九九六年)において、この説を公刊されました。爾来、この考えを堅持され、研鑽を重ねておられます。

まず、西郷が聖書を読んだかどうかということについては、有馬藤太が、西郷より聖書を貸与されたという証言から、読んだことが確認されています。

では、いつごろ、誰から、西郷が聖書を入手したかということについては、幕末に通訳として活躍した外交官、アーネスト・サトウから入手したという説が有力視されています。又、当時、薩摩は密貿易を行っていたので、香港・上海で発行された聖書を入手したとも、考えられます。慶応二年から三年頃と推定されているのです。

「西郷さんが洗礼を受けていたかどうか」ということについては、四年前(二〇〇七年)、顕彰館で開催された「敬天愛人と聖書展」に、福岡から訪れた参加者が、「西郷は洗礼を受けていた」と証言したことが、西郷キリシタン説を一層有力なものにさせました。彼は、西郷が洗礼を受けたという洗礼証明書を見たことがあるが、その証明書は、戦災で焼失してしまったと、証言したのです。その日付けは、明治五年頃、つまり西郷が内閣を組閣していた頃のことであったというのです。文明開化となつてキリスト教禁教令が撤廃され、公にキリスト教を信じる自由が与えられるようになり、西郷さんも宣教師から正式に洗礼を受けるに至ったというわけです。

また、幕末に既に西郷さんはキリシタンになつており、薩摩藩の河邊(かわなべ)一族の屋敷で聖書を講じたり、種子島へ聖書を教えに行ったりしていたという言い伝えもあります。これは、薩摩島津藩と対抗していた川邊一族三十八代当主川邊二夫氏の証言により確認されています。幕末に、既に、西郷さんはキリスト教を信じ、入信していたことなのです。

西郷さんと切つても切れないことばがあります。それは、「敬天愛人」ということばです。このことばの出典は儒教の教